

## 釈迦の出家に思う

釈迦は聖なる願望にうながされて城をでた。そして、確かめるために二人の師についた。禪定と空を教示したくられた。この二人の師のもつ行は、私にも、誰にでもあると思つたが、誰もが必ず煩惱(苦惱)が滅する(消滅・良い方に転ずる)ことを伝えていながら、たことに気がついた。(無上安穩涅槃)しかし二人の師は、尊敬心をもつて釈迦に接してくれた。人が人に与える最大の贈物は、この世に私を選んで生まれてきてくれたから親となれた。私が世の役に必要として生まれてきたことがわかった。これは行き方には金持ち、貧乏という差別、運が良い、悪い、若死には罪の考えがある。釈迦は、平等(平等施一切菩提心)の心を教えたことが、最大の敬い、尊敬とした。

釈迦は二人の師から捨離したと述べた。この捨は、捨てるというのではなく、執着しないというのである。何から執着しないのか、2つある。1つは生死、生まれて死ぬという命終にとらわれないことである。生死をもつという、命の限界があるが、与えられたいのちがある。山川草木、ひとびとのいのちは、いのちを産みだしながら、ひとびとに衣食住と夢を願望として与えつつけていく。夢と希望は、かなえられる願望となつてあらわれる。この願は、すべての苦惱が報われて、安穩(安らぎ)の中に生まれる(を得る。その

世界は、花が咲き、実が実り、鳥がなき、陽はのぼり、ひとびとは助け合つていて世界のことをいう(極楽)。生老病死の苦惱やいろいろな煩惱から解放される。

釈迦が極楽の場面を語つたところが聖求経にある。マガダ国ウルベラーのセーナ二村に到達したとき、川は清れい……と述べていた。私はこれを読んだ時、韓国福祉交流をしていた頃のことを思い出した。李方子女史を訪ねた時である。女子高校生の言葉を思い出した。李方子女史(韓国の慈母)は、日本の皇室から韓国に強制結婚させられた。戦後、障害者の施設をつくられた。その施設のために車椅子修理に訪韓した時、女子高校生は「この韓国の山川はなんときれいなんでしょう」と

言つた。韓国の人々は言つた。「人が優しい、食べ物かうまいと言う人はいるが、わが国土をほめた人はいない」と涙したそうである。山川草木皆仏性である。仏性とは、損取不捨(無上なる慈悲と智慧)ですくつてくたさる。いのちを育て、そして育んでいるのである。女子高生は気がつき語つた。「浄土」と。この世は浄土であり、極楽(無上安穩涅槃)である。

次号は、私達が浄土にすでに生まれているのである。この世で修行なのである。師から離れて、6年間の浄土の中で禅定した。その時魔がおき、梵天のささやきがあり、無明のまどいがひるがえり、仏から如来の歩みとなることを述べてみたい。

## しんらんさまかるた

すみなれた  
きようとへ  
おかえり

親鸞さまは、六  
十年もの住みなれ  
た東国生活に別れを告げ、帰路の途につかれました。それは、当時文化の中心であった京都で『教行信証』の完成をはじめ、お念仏の教えを著述によつて後生に正しく伝えたいという願いか



らでした。

てがみで  
つたえる  
ほとけのおしえ

親鸞さまが京へお  
帰りになつた後、関  
東では、教えを問違  
つて解釈するものもあり、門弟たちははるばる京へ疑義を正しにやってきました。親鸞さまは自らの信心を告白し、また手紙でいちいちお答えになりました。

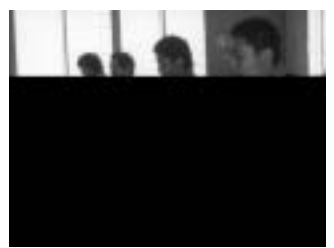


## 釋法弘より のたより

皆様のおかげ  
で、釋法弘は精  
進させていた  
いております。

3月9日より北海道余市町の即信寺様に変有難い仏縁をいただきました。御住職をはじめ、皆様に育てられて、釋法弘は喜んで今日も法務をさせていただきます。寒さきびしい折、皆様御一同様の御法体、御自愛ください。

これからもどうぞよろしく御指導をお願い申し上げます。 合掌



やまさか  
こえて

しんらんさまに

親鸞さまが六十  
二歳のころ、京に

お帰りになると、たちまち関東では、お念仏のみ教えを取り違えて、争いが起こり始めました。熱心なお弟子さんたちは、正しいみ教えをたしかめようと、十余か国の境を越えて、いのちがけで聖人に会いに、京都へやって来ました。



心に如来を思うとき